

報告

日本技術士会北海道本部 社会活動委員会(リージョナルステート研究委員会)

地域活性化のあり方について

地域主権分科会 第4回定例会

武智弘明・中田光治

1. 今の時代に

地域主権分科会終了後の意見交換会でメンバーが「今の時代に、地域活性化は必要なんだろうか!」とつぶやきました。当分科会に限らず、少し前までは『地域活性化』を盛んに語っていましたが、人口減少や限界集落、あるいは集落崩壊の現状に対して、改めて地域活性化の必要性やどのような地域活性化が求められているか、等を再検討すべきタイミングかもしれません。

一歩下がって見つめ直し、または原点に還って考えるために、地域活性化の伝道師の一人である臼井栄三様を講師にお招きし、2024年11月1日に地域主権分科会の定例会を開催しました。参加者は当日が11名(うち3名はZOOM参加)、録画を後日3名が視聴というものでした。

講師は以前(株)電通北海道にも在職され、「試される大地」の発案者として良く知られています。



写真-1 講師写真

企業や団体へのアドバイザー、エッセイ執筆、俳句など多岐にわたる活動をしておられ、これまでの業務経歴で印象深かったことは『北海道米』のキャンペーンであったそうです。

30年前は道民の30数%しか北海道米を食べていなかったが、現在は90%以上が食べているという道内食率の大変化は、北海道米の品質向上が大き

く寄与したことに加え、臼井様たちの仕事の成果がもたらした面があると思います。

2. 講演概要

2024年において地域活性化のために何を考え、どう行動すべきかという原点について、講師は「地域は人間と同じで、元気でいることが本来の姿である」と、そのあり方を説明されました。以下は、講師の説明を概要としてまとめたものです。

(1) 地域が健康であり続ける

地域のあり方、その原点について、心がけているのは『地域を一つの生命体として捉える考え方』であり、生命体が元気であり続けるように地域も元気であり続けることが求められるし、宿命でもある。人も地域も生きていくことは必然である。

地域の問題解決や活性化を考えると、地域を「一つの生命体」と考えみては?

「地域=生命体」は、たとえば「地域=人間」。地域に暮らす一人一人は、細胞のような存在。各細胞が元気なら、人間(=地域)はいきいきする。限界集落は、人間でいえばフレイルの状態か。

図-1 生命体として考える

次に、地域の健康状態を人間のフレイル(虚弱)の概念から考えると、地域の活性化には栄養(地域資源)、運動(労働)、社会参加(他地域とのつながりや関わり合い)が重要である。

地域では人間の元気づくりと同じように、栄養=資源、運動=労働、社会活動=他の地域との交流と置き換えて考察することができるだろう。

また、マーケティングの概念は地域づくりにも応用できるものであり、特に人々との良好な関係構築(リレーションシップマーケティング)の重要性が重視されるべきである。これは企業だけでなく、市役

所、学校、病院など様々な組織にも適用できる考え方である。かつての『大量生産』の時代から『市場の創造』を経て『ニーズの掘り起こし』が肝要な時代へと変化しており、地域活性化の事例を全国的に見ることで新たな視点が得られる。

(2) 元気資源の再発見

マーケティング関係の方が地域づくりに関わると「変わる価値づくり」を進め、「市場の創造」から「価値を提供」「確かな関係づくり」へと歩みを進めようとする。時代や人々のニーズを感知し、対応することで地域は元気になれる。着目すべきはその地域の資源が時代に合致しているか、という点であろう。

その手法として SWOT 分析が有力だろう。地域の強みと弱み、そして外部環境の機会と脅威を整理することで、その地域が絞るべき的が明確になる。地域の弱みも DX の時代では売りに変えることが期待されるし、隣の SWOT も参考になるはずだ。

環境要因	メリット	デメリット
内部	Strength (地域自体の強み)	Weakness (地域自体の弱み)
外部	Opportunities (外部に対する機会)	Threats (外部からの脅威)

図-2 SWOT で考える

(3) 新しい流れ「ガストロノミーツーリズム」

人口 400 人程度の富山県の利賀村（現在は合併して南砺市の一部）に開業したレストランが地域活性化の成功例として紹介されている。このレストランは地道に『有機ひな鶏』を提供することで『卵や野菜も好評』→『メニュー表の絹織物』と『地元陶芸家の食器』にも注目が、と波及して地元の織物や陶芸なども注目を集める素晴らしいスパイラルになった。

この流れは「ガストロノミーツーリズム」と呼ばれる新しい観光スタイルの一例であり、世界中でおよそ 1 億 5 千万人が食事と地域文化を一体として楽しむものであり、若い富裕層が積極的に支持している。良いものが高く売れる一例である。

(4) ありそうでなかった地域ビジネス

上記のほか過疎地域における成功事例として、高知県馬路村のゆずビジネス、徳島県上勝町の葉っぱ

ビジネス、和歌山県北山村のじゃばらビジネス、熊本県の山江村で栽培される「やまえ栗」などがある。馬路村は、登録した来訪者に毎年「ふるさと新聞」を送付し、関係人口の増加を進めている。



写真-2 馬路村の広報例

上勝町の農協職員は、料理店で葉っぱ(妻物)に感動する人々を見て商品化を考え、各戸にシステムを導入した。

北山村じゃばらは、それ自身は美味しくはなかったものと位置づけされたが、20 年間地道に研究し「花粉症に有効」と判明しブレイクした。

山江村やまえ栗は農協合併で名称変更した結果、一時は売れなくなったが、元の名称に戻し工夫したことで、差別化され再び売れるようになった。

これらは、人口減少や高齢化などの課題を抱えていても、地域の特性を活かし弱点を強みに変える発想で、地道に研究や改良を続けたことで成功を収めている。

(5) 自治体の人口増加戦略って

首都圏にあっても目立たない存在だった流山市は、20 年前にマーケティング課を設置し、つくばエクスプレスの開通に伴う宅地開発に対応するためのマーケティング戦略を吟味した。

市では、SWOT 分析を行い、都心へのアクセスの良さを強みとして、共働きで子育て中の世帯 (DEWKS : Double Employed with Kids) をターゲットに設定し、駅前に送迎保育ステーションを設置するなどの子育て対応措置を展開した。結果として 10 年以上にわたり人口増加率が全国トップクラスを維持している。

鉄道・国道・上水道がない東川町だが、「写真の町」「君の椅子プロジェクト」などの効果もあり、人口が増加しつつある。「予算が無い」「前例がない」とは言わない発想で職員が走り回っており、しばしばメディアにも取り上げられている。

美唄市では小学校で『農業科』の授業がある。その副読本は大変な力作で、大人の農作業入門にも役立つ高いレベルの内容である。炭鉱が閉山して、農業に目を向けた美唄市が選択した行動は素晴らしい。



写真-3 美唄市配布の教科書

(6) 次の時代に

今ある地域資源は不変ではない。弱みを強みに変えることで、新たな意味付けや広がり創造することが可能であったし、これからも可能である。その際は、時代や環境に敏感に反応し、対応していくことが重要になる。

時代や環境の変化を受けて新たな価値を持った例として、1990年代以降に再評価されている草間彌生の作品を、出身地である長野県松本市に展示した『松本市美術館』や、世界遺産となった『佐渡の金山』がある。

最近の約50年間の推移は、10年毎にその特徴を抽象化して表現できる。70年代はモデルがあり、目標を設定できたが、80年代には生産性や合

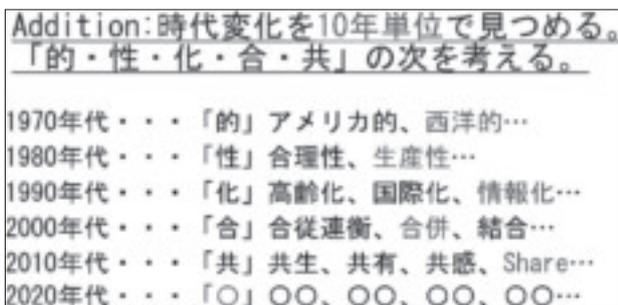


図-3 時代を切り取ると・・・

理性といった軸が据えられ、「24時間戦えますか」のバブル経済がはじけて、低成長の時代となった2010年代では生き延びることに注力した流れと見える。

では、次の10年間はどんな未来となるのだろうか。こうした流れを理解しておくことが欠かせない。そして、時代に遅れた行動により無駄な時間や労力を費やすことは避けるべきだ。

3. 質疑

Q1：かつて国では地方創生が提唱されたが、結局上手いかず、しかし昨今再度試みようとしているようにも見える。そのような国からの、いわば上からの「やらされる」施策をどう評価するか

A1：国は全国一律の施策を出さざるを得ないが、その中から自分たちの地域に如何に活かすかは各地域の担うべき課題である。上勝町で言えばシステム構築に国の支援を導入し、成果を得た。ひとつひとつ違う地域があり、自分たちがやりたいことを、国の文脈に当てはめて支援を得るべきで、そのすり合わせと工夫が試されている。

Q2：他地域を真似ることについてどう評価するか
A2：地形や資源はそれぞれ異なるが、自分たちのプライドを持ちつつやり方を真似ることは良いこと。

ある町で社会人の勉強会合宿を催した際に、その町職員が自発的に参加してくれた。そうした取り組みと行動力が素晴らしいと感じる。

Q3：講師の言う「地域」とはどのような大きさか。また、「人々」とはどのような集団をイメージすれば良いか。

10年単位で物事を考えるような、住民単位からグローバルまでのニーズを追う行為は、小町村の職員には難しいのでは？

A3：地域とは市町村の場合もあり、集落やコミュニティの場合もあるだろう。人々が関わり合える範囲のコミュニティと捉える方が検討しやすい。

利賀村のシェフも初めからガストロノミーリズムを志向したわけではないが、自分が好きな感覚が現代の世の中にフィットしたものだだろう。上勝村の葉っぱビジネスも、原点は自分た

ちで行うことだった。結果として人々のニーズにフィットした点では、感性のなせる技とも言える。



写真-4 会場全景

4. 終わりに

外堀を埋めて、人々の活動を支えるのがインフラであるとすれば、内面から人々が活動するように押し上げるのが臼井講師の視点であります。講師が最近の50年の推移を切りだした特色の列記は、さすがマーケティングの専門家と思われる秀逸な表現でありますね。意味合いは違えども、竹内まりあ作の『心の扉』で20歳代から90歳代までを表現している歌詞にも通じる、インパクトがある抽象化であり、なるほどと感心しました。

講師が世の中の動向を抽象化して下さったのですが、その手法を技術的な分野で真似て、まちづくりなどの社会事象に応用することが我々のミッションであろうと思っています。交通計画や公共事業の事業評価ではこれまでも経済学の知見を取り入れてきましたが、我々は様々な領域の知見を横断的に活用することが意義大きいと思われる。その一つとして抽象化して理解を進めるツールの重要性を、改めて感じたものです。

中でも技術士としてはSWOT分析がもっとも馴染みがある手法であろう(今思えば、筆者も研修で学んだことがありましたが、身につけてはいませんでした)と理解しました。他の市町村と対照しつつ、『利用していない強み』『捨てている資源』を明確にすることで、まずはスタートラインが引けるということです。例えば、前者は未利用の自然エネルギーであったり、後者は捨てているホタテ貝殻であったりするかもです。

そして、一番大事な点は、今の時代に地域活性化

を考える原点です。人間にとって寝たきりになり、介護や看護の結果生きながらえるだけの事態が好ましいと、私自身は思っていません。同様に自治体にとっても、人口減少し、活力が衰退しても地方交付税で生きながらえる事態は好ましくないと思います。そうならないように、元気でいることが原点であるという講師のご指摘は、理解できるものです。

今回、この報告文を作成するにあたり、ZOOM録音から自動的に作成されたAI概要という生成物をベースに文を起こしました。生成されたコンテンツは必ずしも正確でない可能性や誤解を招く可能性があり、当然適切であるかを常にチェックする必要がありますが、文章作成において便利な時代になったと感じました。

さて、地域主権分科会では現在、これまでの研究成果をまとめつつありますが、さらに加えて

基礎自治体の持つべきミニマム

にも幅を広げることで、分科会の目的を達成できると考えています。人口減少への簡単な対応策が見いだせない中ですが、地域資源への注目と、人口が大きく減った自治体の建設部局がどのように生きながらえるべきかを議論をしています。活動は札幌以外の方も可能ですので、皆様の参加をお待ちします。

最後に、今回の定例研修会の講師を快く務めて下さいました臼井栄三様に厚くお礼を申し上げます。また、会場参加やWeb参加で当定例会に参加していただきました皆様にも、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

武智弘明(たけち ひろあき)

技術士(建設/上下水道部門)

日本技術士会北海道本部 社会活動委員会
(リージョナルステート研究委員会)
地域主権分科会 座長
合同会社 武智技術士事務所代表



中田光治(なかた こうじ)

技術士(建設/上下水道/水産等6部門)

日本技術士会北海道本部 社会活動委員会
(リージョナルステート研究委員会)副代表
地域主権分科会 幹事長
株式会社みちのく計画 執行役員技術顧問
札幌事務所 所長

